

オリジナルティーチングプラン



オリジナルティーチングプラン

～C D T（１・２年生の国語）の実施を通して～

守谷市立大井沢小学校 担当 川野 美佳子

1 はじめに

本校では、今年度の校内研修のテーマを「自ら学び考える児童の育成 ～国語科における言語活動を充実させた学習指導の工夫改善～」とし、研修を進めている。昨年度は、言語力の向上の一環として「ことわざかるた」や「百人一首」を購入する予算をいただき、有効に活用させていただいた。

今年度は、さらに踏み込んで、児童の言語力や表現力などの能力や実態を、より正確につかみたいと考えた。校内においても、教師作成のテストを実施しているが、より客観性のあるテストを行い、実態の把握や分析を行いたい。３年生から６年生については、県の学力診断のためのテストを活用するので、１年生と２年生についてのみ、C D T（１年生と２年生、国語）を実施し、言語力や表現力の向上を図るための資料としたい。



2 実施：C D T（Criterion referenced Diagnostic Test）の実施と結果

〈１年生〉

学習の内容		学年平均	全国平均	比 較
国語の総合状況		9 0	8 7	+ 3
観 点 別 状 況	感心・意欲・態度	8 2		
	話す・聞く能力	8 4		
	書く能力	7 1		
	読む能力	9 3		
	言語事項	9 6		
内 容 別 状 況	話す・聞く	8 4	8 3	+ 1
	文章の書き方	7 1	7 2	- 1
	読みとり	9 3	8 8	+ 5
	１年の漢字の読み	9 4	9 1	+ 3
	１年の漢字の書き	9 5	9 0	+ 5
	言葉	9 7	9 3	+ 4

〈２年生〉

学習の内容		学年平均	全国平均	比 較
国語の総合状況		8 4	8 3	+ 1
観 点 別 状 況	感心・意欲・態度	7 8		
	話す・聞く能力	7 6		
	書く能力	7 3		
	読む能力	8 3		
	言語事項	8 9		
内 容 別 状 況	話す・聞く	7 6	7 2	+ 4
	文章の書き方	7 3	7 3	0
	読みとり	8 3	8 7	- 4
	１年の漢字の読み	8 9	8 8	+ 1
	１年の漢字の書き			

〈2年生〉

学習の内容		学年平均	全国平均	比 較
内 容 別 状 況	話す・聞く	7 6	7 2	+ 4
	文章の書き方	7 3	7 3	0
	読みとり	8 3	8 7	- 4
	2年の漢字の読み	9 5	9 3	+ 2
	1年の漢字の書き	9 5	9 1	+ 4
	2年の漢字の書き	8 1	8 2	- 1
	言葉	8 8	8 8	0

3 考察

〈1年生〉

○ 学年の平均正答率は90%で、全国平均を3ポイント上回っていた。国語の基礎的な力が身につけていることがわかった。

また、「言語事項」や「読む能力」「読みとり」「1年の漢字の書き」「言葉」も、全国平均を上回っていた。

- ・ 反面、「書く能力」や「文章の書き方」において、到達不十分：Cの児童が、約30%も見られた。書く力に課題があることがわかった。

〈2年生〉

○ 学年の平均正答率は84%で、全国平均をわずかに1ポイント上回っていた。国語の基礎的な力はあるということがわかった。

また、「話す・聞く能力」や「話す・聞く」「1年の漢字の書き」も、全国平均を上回っていた。

- ・ 全体として、1年生よりも到達不十分：Cの児童が多く見られた。1年生と同じく「書く能力」や「文章の書き方」において、到達不十分：Cの児童が約20%見られた。2年生も書く力に課題があることがわかった。

また、各項目において数名ずつ、到達不十分：Cの児童が見られた。早急に、遅れている児童へのケアが必要なことがわかった。

4 課題

○ 今回の結果から、1・2年生ともに、国語の総合状況において、全国平均を上回っており、国語の基礎的な力があることがわかった。この力をさらに伸ばし、中・高学年につなげられるように、きめ細かい指導を続けていきたい。

- ・ 反面「書く能力」や「文章の書き方」については、到達不十分：Cの児童が多く見られるなど、課題が残った。Cの児童の学力回復とともに、全国平均より下回っている内容を細かくチェックし、補充的な学習を行うなど、今回の結果を、これからの指導に十分にいかしていきたい。

3年生からは、県の学力診断のためのテストがあるが、低学年にはない。今後のこのようなテストを継続的に行い、児童の言語力の向上、学力の向上に努めていきたい。



基礎基本の定着を目指した学習支援 ～SUNサントイム、オープンルーム（算数）の実施～

守谷市立守谷小学校 担当 関 慶広

1 はじめに

本校では、基礎基本の確実な定着を目指して「SUNサントイム」と「オープンルーム」の学習支援を実施している。「SUNサントイム」は、学習ボランティアの「まるつけ先生」にお手伝いをいただき、計算力と学習意欲の向上を図っている。また、「オープンルーム」は、3～4年生の希望者を対象に算数の個別支援を行うものである。

2 実践

(1) SUNサントイム

○ねらい

学習ボランティアの協力のもと、習熟度に応じた指導を行うことで児童の計算力及び学習意欲の向上を図る。

○内 容

算数の基礎学力向上を目指した繰り返し学習の時間とする。担任教師と担任外的全教師が支援に当たる。保護者から 学習ボランティア「まるつけ先生」を募集し、プリントの採点などの支援に協力をいただく。

対 象 全児童

場 所 各教室

時 間 原則第1，第3金曜日の朝自習の時間

担 当 全職員，学習ボランティア「まるつけ先生」

○実施までの流れ

5月 21日 保護者ボランティアの募集

5月 31日 保護者ボランティア決定

6月 7日 第1回「SUNサントイム」開始

○実施計画

回	月	日	曜日	時間
1	6月	7日	金	8:20～8:40
2		21日	金	8:20～8:40
3	7月	12日	金	8:20～8:40
4	9月	6日	金	8:20～8:40
5		20日	金	8:20～8:40
6	10月	4日	金	8:20～8:40
7		18日	金	8:20～8:40
8	11月	1日	金	8:20～8:40
9		15日	金	8:20～8:40
10	12月	6日	金	8:20～8:40
11	1月	17日	金	8:20～8:40
12		31日	金	8:20～8:40
13	2月	7日	金	8:20～8:40
14		21日	金	8:20～8:40



まるつけ先生の委嘱



SUNサントイムの様子

(2) オープンルーム

○ねらい

朝自習の時間を利用し、全学年までの計算の復習をすることにより基礎基本の定着を図る。

○実施方法・内容について

算数オープンルーム

- ・ 3～4年生の希望者（希望者以外は読書）
- ・ 四則計算の復習（2，3年生及び4年生の内容の1部）プリント，テスト

学年	3～4年生
場所	1階少人数教室，2階少人数教室
時間	原則第2，第4金曜日の朝の自習時間
担当	滝，佐々木，山中，田谷，奈幡，大熊

○実施の流れ

4月 8日 申込書配布（3～4年生全員）

4月15日 申込書回収

4月19日～準備開始

- ・ 名簿作成・（ファイル購入，集金はテスト実施後）
- ・ 教材準備・印刷

5月～ オープンルーム実施

- ・ 学年末に個人の学習ファイルを返却
- ・ 最終日に振り返りカード記入。
- ・ 担当者がコメント記入。
- ・ 学級担任を通して保護者にコメントをもらう。
- ・ 学期末に回収，学校で保管する。

○実施計画

実施日	内 容	実施日	内 容
※5月第2週	事前テスト	11月	3・4年の復習
5月第4週	2・3年までの復習	12月	3・4年の復習
6月	2・3年までの復習	1月	3・4年の復習
7月	2・3年までの復習	2月	まとめのテスト
9月	3・4年の復習		
10月			

3 成果

- ・「SUNサuntime」の学習ボランティアの「まるつけ先生」は，子どもたちにとって身近な存在となっており，丸をつけてもらうことを楽しみにしている。今年は，33名の保護者の協力が得られ，各クラスに2～3名の配置をすることができた。
- ・「オープンルーム」では，朝の自習時間を利用することで十分な練習時間を確保することができた。学習意欲の高まりが見られ，課題に集中して取り組むことができた。学力診断などの各種テスト結果にも，成果が表れている。

4 課題

- ・現在1～4年生まで配置している「SUNサuntime」の学習ボランティアですが，高学年でも十分に効果が期待できるので，募集を増やしていきたく考えています。



オリジナルティーチングプランの実践 児童の思考力 判断力 表現力を育むための新聞を教材とした学習活動

守谷市立御所ヶ丘小学校 担当 倉持 久美子

1 はじめに

本校では、「思考力・判断力・表現力をはぐくむ国語科学習指導の在り方～「読むこと」における単元を貫く言語活動の充実を通して～」というテーマのもと、校内研修を行ってきた。児童の思考力・判断力・表現力を育むために、目的に応じて活用しやすく、考えを広げたり深めたりすることに有効な新聞を学習に取り入れたいと考えた。新聞記事には漢字や難しい語句も多いので、必然的に辞書を活用する機会も増える。また、新聞の読み取りは習慣化していくことで読む力や言語能力の向上につながると考えられる。

児童が新聞記事に興味を持つためには、新聞が児童の身近な場所にいつでも読める状態であることが大切である。また、児童が新聞記事を読むことに慣れていけるよう、家庭で記事のスクラップを進めることや「新聞記事を読んで分かったこと・考えたこと」をテーマとして朝の会の一言スピーチを行った。国語科や社会科を中心とした授業の中では、新聞記事をもとにして自分で考え、判断し、周りの人と意見を交流することができるような言語活動を多く取り入れた。

新聞を教材として取り入れることで児童の思考力・判断力・表現力を育むことはもちろん、児童の「より良い社会を作っていく」という意識を高めていきたいと考えている。

2 実践

(1) 実施計画

- ・児童が新聞に慣れ親しめるように、4学年以上の各教室に新聞を設置する。

4年生・・・毎日小学生新聞
5年生・・・毎日小学生新聞、朝日小学生新聞
6年生・・・毎日小学生新聞、朝日小学生新聞

- ・国語科において、数社の新聞記事を読み比べ、記事の内容やねらいを読み取ることができるようにする。
- ・国語科において、新聞の投書を読み、書き手の意図を読み取るとともに説得力のある意見文の書き方を習得できるようにする。
- ・社会科において、社会的事象について新聞記事から問題を見い出して追究し、より広い視野から思考・判断・表現できるようにする。
- ・道徳において、各界の人物の生き方等の記事を取り上げ、自分の生き方について考えられるようにする。
- ・理科、家庭科、保健体育、総合的な学習の時間等で新聞記事を活用する。

(2) 新聞コーナー

4年生から6年生の各クラスに新聞フォルダーを置き、新聞係が毎日掲示を行った。朝の読書の時間や休み時間に手にとって読む児童が増えた。また、係が情報コーナーに記事の切り抜きを行い、記事の内容に興味を持てるような環境を整えた。

(3) 一言スピーチ

朝の会で「一言スピーチ」の時間を設け、家庭で新聞記事を読んで、内容の要約と感じたこと・考えたことを書いてくるようにした。また、自主学習の一つとして新聞記事のスクラップと要約や感想を書くことを奨励し、新聞記事を読み慣れるようにした。



(4) 第5学年の実践

- ①単元名 書き手の意図を読み取って見出しをつけよう
「見出しコンテストをしよう」

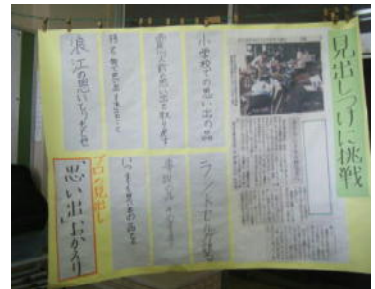
②授業の実際

本単元では、新聞記事に込めた書き手の意図を読み取ること
をねらいとして、記事の見出し付けを行った。

導入では、短い記事の見出し付けに挑戦した。授業の最後に
プロの付けた見出しを提示したところ、「さすが。」という声
が上がった。より効果的な見出しを付けるためにプロはどのよ
うなことに配慮して見出し作りをしているかを理解し、課題意識
をもつことができた。

第二次の比べ読みの際には、ばらばらになった写真や記事を
真剣に取り見出しに合わせていた。パズルのような感覚で
意欲的に選んでいた。全体で確認した時には、多くの児童がそ
の記事を選んだ理由を明確に述べることもできた。

練り上げやコンテストの際にも、記事を指し示したり、書き
手の伝えたいことを述べたりしながら見出しを発表する児童の
様子が見られた。



(5) 第6学年の実践

- ①単元名 説得力のある意見文を基に討論しよう
「新聞の投書を読み比べよう」

②授業の実際

本単元では、同じテーマに対する新聞の投書を比べて読むという言語活動を通じ、読み手
を説得するための工夫がどのようになされているかをとらえ、文章を評価する力を育てることを
ねらいとした。さらに最終ゴールは、自分で書いた意見文をもとに、理由や根拠をはっきりと
させながら自分の思いや考えを伝える討論会を設定した。児童がいつでも参考にできるように
子ども新聞等の投書欄を読める環境を整えておいた。

第二次では、投書の書き手の意見について自分はどう考えるかを意識しながら読み、それぞ
れの投書の説得の工夫をとらえるという課題を設定した。投書の印刷されたワークシートを色
分けすることで、一つ一つの文の構成を理解することができた。説得力のある意見文にするた
めの工夫について個人やグループなど様々な形態で活発に話し合うことができた。

第三次ではテーマを設定し、読み手を説得するための書き方の工夫を生かして、投書欄に投
稿する目的で意見文を書いた。投書をもとに討論会を開き、意見の交流を行う中で自分の考え
や感想を伸び伸びと伝え合うことができた。

3 考察と課題

小学生新聞を手の届くところに掲示したり、一言スピーチの回数を重ねた結果、児童は新聞記
事を抵抗なく読めるようになってきた。5年生一人一人が「見出しコンテスト」に向けて付けた
記事の見出しは、書き手が記事に込めた思いを良く読み取ったものになっていた。グループで見
出しを練り上げた際にも、書き手の伝えたいことをしっかりとらえて意見を述べる児童が増えて
きた。6年生は、新聞の投書を手本として書き方の工夫をつかんだことで、身近なテーマについ
ての自分の思いや考えを伝えるためにはどのようにしたらよいかということが分かってきてい
る。

今後も、各教科の学習に新聞記事を活用していきたい。ある記事をテーマにして意見の交流を
行う際には、理由や根拠をはっきりとさせながら話すこと、話し手の意図をとらえたり自分の意
見と比べたりしながら聞くことができるよう意識させ、さらに自分の考えを広げたり深めたりで
きるように力を付けていきたい。

オリジナルティーチングプラン

「自分の思いや考えを表現できる児童の育成」に向けて

守谷市立松前台小学校 池田 恭

1 はじめに

本校は、平成25・26年度に守谷市の研究委嘱を受け、「自分の思いや考えを表現できる児童の育成」を目指し、国語科を中心に研究を進めている。また、本年度の学校組織目標を「各教科領域において、文章や資料を正しく読み取り、自分の考えを表現できる児童を育てる。」とした。

本校の課題は、「表現する力」を高めることである。そのためには、文章や資料を正しく読むことができる「正しく読む力」の育成が必要であると考えている。今年度は、国語科の説明的な文章の学習において、正しく読む学習を充実させるとともに、それを活かして「表現する力」を伸ばしていくことができればと考え、日々の実践をしてきた。

その他の取組として、辞書を積極的に活用したり、読書活動の推進をしたりしながら、基礎的・基本的な国語の力の向上も目指している。さらに、オリジナルティーチングプランの制度も積極的に活用し、「正しく読む力」を伸ばすことができればと考えた。そこで、くり返し学習や補充学習等にワークシートを積極的に活用し、本校の課題を解決し、児童の学力向上を目指してきた。

2 実施計画

(1) オリジナルティーチングプランで活用したワークシート

授業の中での活用はもちろん、短時間の朝自習やテスト・宿題等、いろいろな場面で活用できることをねらい、以下の国語のワークシートを購入した。

「正しく読む力」や「表現する力」を伸ばすもの、くり返し活用できるもの、系統性のあるものを、全職員で検討し選んだ。

- ・国語力が付くワークシート
- ・読解力を高めるワークシート（文学作品）
- ・読解力を高めるワークシート（説明文・詩）



(2) ワークシートの活用方法

① 「えんぴつタイム」での活用

朝自習「えんぴつタイム」を毎週水曜日に位置付け、1・2学期は、オリジナルティーチングプランで購入したワークシートを中心に、全学年で実施した。3学期は、表現する力を伸ばすために、「折句」「言葉かるた」「俳句」「短歌」づくりを実施した。

	月	火	水	木	金
朝自習 8:15～ 8:30	読書	計算ドリル	えんぴつ タイム	漢字ドリル	読書

② くりかえし学習・補充的な学習での活用

ワークシートについては、「えんぴつタイム」だけでなく、授業や家庭学習などでも活用し、児童の基礎・基本の定着や「正しく読む力」の育成に活用した。

3 実践

(1) 国語力が付くワークシートの活用

これまで、児童は、ドリル的な繰り返し学習を行うことが多かった。国語力が付くワークシートには「部首」や「漢字の形」など問題があり、様々な角度から国語力を付けることができた。

短時間にできる内容の問題で、主に、「えんぴつタイム」に活用した。くり返し活用することで、児童の国語力の向上につながった。



(2) 読解力を高めるワークシートの活用

① 低学年の取組

主に、補充的な学習に活用した。教科書以外の文章にふれることで、最初は、とまどいもみられたが、徐々に、慣れてきて積極的に取り組む姿が見られた。

② 中学年の取組

教科書に載っていない文章を中心に活用した。問題を読み、文章に線を引き、しっかり写して書くことを意識させた。

③ 高学年の取組

教科書の文章の読み取りの補充として活用することができた。授業の中での活用はもちろん、短時間の朝自習やテスト・宿題等でも活用することができた。

3 考察

本校の課題を解決する1つの取組として、オリジナルティーチングプランを活用した。ワークシートを活用する場面に明確に位置付けたことで、活用を進めることができた。今後も継続することで、児童の「正しく読む力」の向上につながると考える。

また、低・中学年の実践から、教科書以外の文章に触れる機会が増えたことは、児童にとって有効であったと考える。高学年での補充的な活用のしかたも、有効であるとする。

さらに、家庭学習として取り組ませることで、「読む力」の定着に役立った。今後も、継続的に活用し、児童の学力向上につなげていきたいと考える。



4 課題

- ・ワークシートの活用を進める際、個に応じた指導をどのようにしていくか研修を進める必要がある
また、できなかった問題や無答をそのままにしない指導や朝自習・家庭学習等で活用した場合、どのように評価するかも課題である。
- ・本校の課題を解決するために、ワークシートを活用してきたが、年度が替わっても、目的をしっかりと確認し、有効に活用できるようにしていく必要がある。

Q-Uテストを活用した学級集団づくり

守谷市立御所ヶ丘中学校 担当 竹久 武志

1 はじめに

本校は、「すべて子どもたちが特別な存在」である、「人は支えられてこそ人となる」、「みんなが（教育的な）資源（であり）、みんなで支援」をしていくという学校長の理念の基、教育活動を展開している。その理念をすべての教育活動に生かし、具現化していくには「支持的風土」をもつ、規範意識の高い集団の形成が不可欠である。これは、言葉を換えれば生徒にとって居心地のよい学校、学年、学級をいかに創造していくかということになる。このためには、生徒の現状を把握する必要がある。その1つの方法としてQ-Uテストの活用があげられる。Q-Uテストからは、「学級集団の状態」、「個人のおかれている状況」、「学級集団と個人のかかわり」を知ることができる。今回は、学級集団が徐々に固まりつつある第1学年の生徒を対象とし、Q-Uテストの結果から集団、個人に応じた手立てを講じ、よりよい学級集団をつくる実践である。

2 実践

（1）Q-Uテストの結果

※ 第1学年（1組～6組）生徒210名 7月1日実施

学級満足度尺度結果のまとめ

群	人数【人】	割合【%】	全国【%】
A 学級生活満足群	110	52	35
B 侵害行為認知群	30	14	17
C 非承認群	29	14	15
D 学級生活不満足群 （要支援群）	41 (9)	20 (4)	33

※ A：学級内に自分の居場所があり、学校生活を意欲的に送っている生徒

B：いじめや悪ふざけを受けているか、他の生徒とトラブルがある可能性が高い生徒

C：いじめや悪ふざけを受けていないが、学級内で認められることが少ない生徒

D：耐えられないいじめや悪ふざけを受けているか、非常に不安傾向が強い生徒

学校生活満足群に属する生徒の割合は、全国平均に比べても高い。しかし、他生徒とのトラブルを抱えている、非承認感を抱いていると予想される生徒も半数近くいることが分かる。これらの生徒の気持ちを全体と個別のアプローチによってA群の範囲へ変容させていきたい。

（2）集団への手立て（構成的グループエンカウンター）

構成的グループエンカウンターは、自己理解や他者理解を促し、信頼感や自尊感情を高める効果がある。これまでも様々な実践が紹介されているが、今回はスクールカウンセラーの指導を仰ぎ、理論と方法を再整理して実戦に臨んだ。まずは、どのクラスもスクールカウンセラーと担任が協力してエクササイズを行い、その後その経験を生かして、計画的に学級活動等で実施するようしてきた。



初めはどの学級でも賑やかな雰囲気があったものの、繰り返し行うことで真剣に行うことができるようになり、シェアリングシートには皆に認めてもらったと集団の温かさを感じている記述が見られるようになった。本校では、構成的グループエンカウンターと並行して、ソーシャルスキルトレーニングも計画的に導入している。

(3) 個への手立て（教育相談）

生徒のもつ悩みや問題の解決を援助・支援するため、学期に1度、各学級の担任が学級の全生徒と計画的に教育相談を行うようにした。一人一人の生徒の話を傾聴し、カウンセリングマインドを生かして対応することによって、生徒の気持ちの整理や自己肯定感、自己コントロール、自他受容等の心情を高めていった。特に、Q-UテストでB群、D群に属した生徒に関しては、チャンス相談を繰り返し行い、心情の理解に努めるようにした。問題があった場合は、担任が一人に対処するのではなく、1学年主任を中心としたチームで対処したり、生徒指導主事を中心としたチームで対処したりした。素早く適切な対応を心掛けた。

(4) 授業の改善

本校では、これまで学習形態や学習過程を工夫して、生徒同士が互いに認め合い、高め合う学び合いの学習を展開してきた。本年度は新たにユニバーサルデザインの視点を授業に導入し、すべての生徒に分かる授業を展開している。ICT機器を活用したり板書を工夫して授業を視覚化したり、学習活動をスモールステップにしたり、事象を単純化させたりして焦点化したりしている。また、具体物の活用や具体的な体験的活動を導入して分かりやすさを明確にしている。授業が分かることで生徒に自信をつけさせ、自己有用感を高めていきたいと考えている。

3 成果と課題

生徒の日常の学校生活の様子を見てみると、小さなトラブルは起こるものの全体の傾向として、互いに認め合い協力し合う集団として機能していることが伺える。実態を的確に把握し、手立てを講じ、全体へのアプローチと個別のアプローチを行ってきた成果であろう。不登校に陥りそうであった生徒が、周りに支えられ再び学校生活を楽しむことができるようになってきていることから成果が見て取れる。ただし、予算不足で2度目のQ-Uテストが実施できず、変容を比較、考察できていない。来年度も継続して行い、その変容から更によりよい集団づくりを目指して、手立てを改善していきたい。また、他学年にも調査を広げていきたい。

オリジナルティーチングプランの実践

学級における円滑な人間関係形成のための教育相談の構築

～QUテストの活用を通して～

守谷市立けやき台中学校 担当 村上 清子

1 ねらい

本校は「学力の向上と人間関係形成力の育成を図る」を組織目標としている。さらに、主な取組の二つ目の柱として「心の教育の推進」をあげている。その中で、「生徒とのふれあいを大切にした学級経営を通して、人間関係づくりを推進する」としている。

本校は、各学年ともに不登校の生徒が在籍している。昨年度は、入学の時点で不登校ではなかった生徒が、途中で不登校になったケースが2件あった。生徒の様子を見てみると、生徒同士のかかわりが希薄になる傾向が見られ、さまざまな人間関係に悩み、学校生活に十分に適応しているとはいえない生徒も見られる。

そこで、本校では、生徒の内面を把握し、人間関係構築を支援するために1学期、2学期、夏休みと年3回の生徒や保護者に対する教育相談を行っている。また、定期的に生活アンケートを実施し、きめ細かく生徒の様子を把握することを心がけている。さらに、きめ細かく生徒の内面を把握するために、日頃の観察、教育相談、生活アンケートに加えて、QUテストによるデータを複合的に見ることで、生徒への有効なかかわりができると考えた。

2 実施した QU テスト

hyper-QU ～よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート～（図書文化）

3 実施計画

○1年生において、QUテストを実施する。

4月 第1回教育相談

- ・生活アンケートや日頃の観察、小中連絡会の情報を基にした担任と生徒の教育相談

7月 第2回教育相談

- ・生活アンケートや日頃の観察、自己評価に基づく担任と生徒の教育相談
- ・夏休みに保護者と生徒との三者面談
- ・学級経営の見直し

10月 QUテストの実施

- ・QUテスト結果、生活アンケート、自己評価に基づく担任と生徒の教育相談
- ・学級経営の見直し

4 実施までの学年での研修

4月 QUテスト実施について確認する

- 5月 生活アンケートによる教育相談実施（以下、毎月必要に応じて実施）
生徒の交友関係や生活状況から、QUテストの実施を2学期とする。

7月 担任と生徒による二者面談
担任、保護者による二者面談（全員）

10月 QUテスト実施
結果を基に学級経営の見直しを行う。

○ QUテスト実施日（平成25年10月15日 実施人数148名）

1月 次年度の学級編制の準備のために QUテストを参照

5 QUテスト活用例

・要支援群に属する生徒（Aの場合）

真面目な生徒で、日常生活の中では特に目立った行動はないが、同姓の集団の中にいることが少なく寡黙。作業に時間がかかり、提出物も遅くなりがちである。部活動では生き生きと自信をもって活動する姿があった。

この生徒が QUテストで要支援群に属するという結果であった。そのため、孤立感や不安感を除くため、活動での声かけや授業での支援について共通理解を図り、支援を行った。その結果、表情も明るくなり、同姓の級友と談笑する姿が見られるようになった。

・学級生活不満足群の生徒（Bの場合）

何事にも意欲的で、活動の中心として働きたいという気持ちが強い。行事ではリーダーに立候補するなど積極的である。実際は話合いをまとめる力はなく、自分の思いを相手に伝えることも不十分である。学力も低く理解力も弱いが、本人は自分に自信をもっており、周りが自分を理解していないと感じている。QUテストの結果から本人の考えが肯定されたため、担任を中心に指導の方向性を確認した。本人の努力を認めながら、本来の自分を受け止めることができるように支援を続けている。

・学級生活満足群の生徒（Cの場合）

常に明るい笑顔で友人の輪の中心にいるような存在で、活動への取組も意欲的である。本人は、学力が高くないことへの不安をもっているが、まだ深刻な状態にはなっていない。友人関係においては、女子グループの悪口や陰口の話題の中に、言っている側として名前が出てくることが多いため、学習や生活、部活動に関して情報交換を行っていた。QUテストでは、学級生活に満足しているという結果であったが、学年の研修で、どのような状態での満足なのかを観察していく必要があると問題提起があり、担任を中心に友人関係を見守ることとした。その後、大きなトラブルはなく、現在に至っている。

6 今後の課題

生活アンケートや教育相談に併せて、QUテストを実施することで、普段の生活では気付くことが難しかった生徒の内面を理解し、個々の生徒に合わせた支援を行うことができた。

今後は、さらに効果的な QUテストの実施時期や回数の判断、活用の仕方についての研修を深めた上で、教師間の共通理解や役割分担を行うことにより、より適切な支援体制を構築していきたい。